

徹底検証

チョコレートのパッケージに マスクはありだったのか？

～そして新たな決意～

佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長)

2006年から始まったチョコ募金。2018年度は、かつてないほど募金が伸び悩み、例年は2月半ばに終了するところが、バレンタインが終わっても、まだ約2万個のチョコが残っている非常事態になり、終了するのに4月10日までかかってしまった。

原因は何なのか？検証した。

1. 募金そのものが減っている

ここ10年くらいで日本のNGOは政府の助成金に頼り、多くの資金を得ることはできても、募金活動など一般市民に訴える資金調達を怠ってきた。特にイラクに至っては、退避勧告が出ているから日本人が深く入っていけない。生の情報を流せない。情報発信の難しさがある。

日本の国際的な立ち位置もある。かつて緒方貞子さんや、明石康さんのような人物を送りだし、先陣を切って世界の平和のために貢献しようという日本の外交姿勢も崩れている。安保法制や、武器輸出の緩和、核兵器禁止条約にも反対するなど、日本の積極的平和主義は、武力を用いた人道的介入へと向かっているようにすら見えてくる。戦争に必要な人道支援を担うことで、NGOもオールジャパンとして戦争ビジネスの真ただ中に入り込んでしまう。

そんなイメージを持たれてしまうと、一般の関心は薄れてしまう。JIM-NETでもチョコ募金だけでなく寄付が減り始めているのだ。



2. 広報が難しい

かつては新聞に記事を書いてもらえば、それだけで反響があったが、新聞の発行部数が毎年減っている。TVもインターネット社会に喰われている。情報が氾濫し、いつでもどこでも、好きな情報だけ(しか)を取ることができる。戦略的意図をもって、技術を駆使しないと、SNSに流しても、実は限られた内輪にしか情報はとどかない。

検索のキーワードとハッシュタグが重要になってくるが、「イラク戦争」というキーワードでは、JIM-NETへのアクセスは低くなってしかるべき。

NEWS

チョコレートのパッケージにマスクはありだったのか？～そして新たな決意～

佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長) 1

【シリア現地報告】シリアへの渡航～現地の状況はいま

リーム・アッバス (JIM-NET アルビル事務所スタッフ) 4

【イラク現地報告】第17回JIM-NET会議を開催

井下 俊 (JIM-NET 理事・医師) 6

【イベント報告】ART for PEACE～平和のためのアート

崔 麻里 (JIM-NET 広報・イベント担当) 7

鎌田代表のつぶやき『曇り、ときどき輝く』

鎌田 實 (JIM-NET 代表理事・医師) 8

JIM-NET事務局に新しいメンバーが着任しました！

金澤絵里 (海外事業担当)・上出貴史 (経理・総務担当) 8

3. バレンタインの危機

JIM-NET が立ち上がった当初から織り込み済みで、2-3 年もたてば、イラク戦争のことなどみんな忘れてしまうだろう。しかし、クリスマスやバレンタインを忘れることはないだろうから、「#チョコ」というハッシュタグをつけたはず。ただ、チョコレート業界ではバレンタインのチョコ収益が 10 ~ 20% 減ったというデータもあり厳しい時代が到来しているのだ。

4. チョコの缶のデザイン

「マスクをかけているのが怖い」

「チョコ募金、申し込みました。今年のマスクの絵は、受けませんね。それが現実。だからどうなんだということは言いません。がんの子どもだとわかる人は少ないのではないのでしょうか」

「毎年子どもたちに贈っています。各自選んでもらうのですが、今年はマスクしていて、戸惑っていました」

「いつもご苦労様です。ささやかですが私のブログなどを通して、PR させていただいております。ただ、今年はデザインが今ひとつで（マスクの意味が一般受けしない）正直のところ評判があまりよくありません」というネガティブな感想がちらほら入ってきた。花に比べて一般受けしない。

マスクをした子どもたちの絵を使ったのは、どうしてこの子どもたちがマスクをしているの？ バレンタインに何でマスクしているチョコを私がもらうの？ JIM-NET は何でそんなものをチョコ募金に使うの？ ... と疑問だらけになってもらいたいから。

そのためにも SUSU の絵は、がんという悲惨な状況すらもコミカルに描いていたからすごいと思った。SUSU は、バスラ出身で 10 歳で卵巣がんになって、「死」と直面した。その当時描いた絵は半端ないほどの量であり、登場人物はほとんどがマスクをかけていた。JIM-NET の支援で生きることができた。19 歳になっていた彼女をアルビルまで呼び出したのは、絵を描いてもらうだけでなく、心理社会的なサポートは何をやっていけばいいのか、生存者の彼女から教えてもらうことだった。

実は、がんの子どもたちは、たとえがんが治っても社会参加するのが難しい。治療のために学校をドロップアウトするケースも多いから、仕事にもつけない。引きこもってしまう。

SUSU もそうだった。

「マスクをつけて学校に行くと、みんながじろじろ見る。心の中では、『うつる病気に違いない。近寄ると髪の毛が抜けてしまう』と思っている。だから皆、私から逃げた」

SUSU は学校に行くのが嫌になり中学 1 年でリタイヤした。

「実は子どもの頃から父と楽しい時間を過ごしました。父の趣味は詩を書くことでした。父が詩を書きながら私が絵を描きました。小学校に入ると、学校ではほとんど絵を描くことがなかったんです。入院して、つらかったから楽しそうなことをやりたかった。周りの人々やイブラヒムさんや先生たちも励ましてくれました。たくさん絵本や塗り絵をくれました」

しかし、SUSU の絵には時々ハッとさせられる。子どもが点滴をされて天国に行こうとしている絵。病院で同じくらいの子どもたちが次々に死んでいく。明日は、自分かもしれない。死刑囚と似たような恐怖の中で治療を続けた。



佐藤真紀事務局長（左）とSUSU（右）

「皆が、私のことを『死んでしまう子』って憐みの眼差しで見つめている。そのこともつらかった」

2 年間の治療を終えて、検査のために通院しても、彼女は医者には会わなかった。「検査結果を聞くのが怖くて、母が医者と話している間は、逃げていました」家族以外の人と打ち解けることはなく引きこもっていた彼女に、アルビルに来てがんの体験談を話してもらった。1 年間に 3 回ほど来てもらった。

アルビルのサッカークラブのイベントでは、彼女が描いた絵を使った T シャツを作り、がんの子どもたちがサッカーを楽しんだ。シリア難民キャンプでは、子どもたちに、「もしも同級生にがんの子どもがいたらどうしたらいい？」というセミナーを開いた。

「とても楽しかった。子どもたちも可愛くて色々話しました。皆が頭の中にたくさん夢がありますね。リアル・マドリードに入ってサッカーをしたいとか、宇宙飛行士になることと言う夢です。私もあの子どもたちを励ますことができるんだと感じました」

SUSU は、その後、がんの子どもたちのために貢献したいと思



うようになった。

「私をはじめ、JIM-NETのお蔭でたくさん子どもたちの命が助かりました。私の絵が子どもたちを助けることに役立つのなら、それほど嬉しいことはないし、がんの子どもたちがたくさん絵を描いて、また素敵なチョコができればいいと思います」

SUSUは、現在バスラで院内学級を手伝っている。そしてイブラヒムに勉強を教わって、学校に行こうとしている。「卒業したら留学したい」



つながるチョコレート

私は、日本で高校をいくつか回り、チョコの話をした。

前列に座っていた女の子に質問を試みたが、何も答えてくれない。緊張しているのだろうと、しばらくしてからまた当たってみたが、何も答えてくれなかった。恥ずかしい思いをさせてしまったと、申し訳ないなど思っていたが、講演が終わるとその子が駆けつけてくれて、「SUSUの絵に感動して言葉が出てこなかったんです。私も絵を描くのが好きで、それくらいしか取り柄がないけど、絵を描くことで役に立って素敵なことだと感動しました」そう言うと彼女は自分が描いた絵を見せてくれたのだ。

生徒たちがチョコ募金を取りまとめくれた高校もあった。

小学生も募金してくれている。「わたしは1年生の女の子です。チョコぼきんは、お母さんがおしえてくれました。わたしはお年玉をたくさんもらったので、お母さんとはんぶんずつお金をだしてぼきんすることにしました。これでだれかのところに、だじなおくすりごとどくといいです。来年、またお年玉をもらったら、ぼきんします。チョコも絵のかいてあるいれものも、とてもたのしみにしています」

JIM-NETに寄せられた意見の中で、デザインに関しては2割ほどが否定的だったが、8割はこのよううれしいメッセージである。

さあ、これからだ。

みんながHAPPYになるチョコは、歴史に新たなページを刻むチョコとなった。3月は、311に合わせ、福島強化月間とした。8000個のチョコを福島を応援するために使おうと決めた。

まず、J3のクラブチーム、福島ユナイテッドFCの開幕戦が3月11日に行われた。試合の前には追悼セレモニーを行うという。鈴木社長にお願いして、2000個のチョコを来場者にさしあげた。SUSUの絵に福島ユナイテッドのユニフォームを書き込んだポストカードを付けた。選手たちもサカベコを作ってくれて、その日試合に出ない選手が募金も呼びかけてくれたのだ。全くJIM-NETを知らない人にも私たちが福島支援を続けていることを伝えることができた。

東京の事務所で袋詰めのボランティアを募集したら、福島ユ



ナイテッドのユニフォームを来て手伝いに来てくれたサポーターさんたちもいて新たなつながりができた。

同じ日に日比谷公園で行われたピースオンアースでは、震災時に福島の子も達が描いたマスクをした自画像をポストカードにつけた。

震災から一年経って、何が変わった？って聞いて書いてもらった絵だ。

「げんぱつがあって、ほうしゃのうをあびたためにマスクをかけなくてはいけなくなった」「おかあさんにあえなくなった」といった言葉が添えられている。2012年の真実だ。

福島の子もたちがマスクをかけた絵を描く、イラクの子もたちがマスクをかけた絵を描く、なぜ？それはみんな強欲な大人たちのせいだ。

南相馬にあるNPO法人「ほっと悠」の村田理事長は、県内117か所の障害支援施設の利用者3521名にチョコを配ってくださった。その一つである西白河郡にある「こころん」から感謝状をいただいた。

「あの原発事故から7年が経ちました。いまだに放射能汚染の影響は続いています。しかし、職員、利用者さんともに前を向いて進んでいます」

利用者からの感想も添えられてある。「缶の柄も素敵で、ハート型のチョコレートも何種類もあっておいしかったです。ありがとう」鉛筆で下書きしたうえでボールペンで書いているのが微笑ましい。

やぎりんカルテット・リベルタのリーダーであるやぎりんこと八木倫明さんは、東日本大震災の被災地での音楽活動を通して復興支援をしている。桜の聖母生涯学習センターが主催する復興コンサートに出演し、コンサート会場で参加者にチョコを配ってくださった。

4月になると、春の特別キャンペーンということで、今までチョコのパッケージに使った子どもたちの花の絵を集めてポストカードを作り、チョコ募金をしてくださった方に差し上げ、4月10日に2018チョコ募金は終了することができた。

マスクのチョコは、伝説のチョコとなった。2019年のデザインは既に出来上がり、「いのちの花」最終編になる予定。マスクのチョコは時代が早すぎたのかもしれない。でも、こんなチョコが平気でプレゼントされるようなそんな社会が、いずれ来てほしいと願う。

これからもSUSUの絵は、がん患者への偏見や、差別をなくしていくキャンペーンには使っていくし、JIM-NETは、日本の国内で、がん患者に寄り添い心理社会的に支えている団体の方々とも一緒にアドボカシーをやっていく。

シリアへの渡航～現地の状況はいま

リーム・アッバス（JIM-NET アルビル事務所スタッフ）

リーム・アッバス（シリア・カミシリ出身 JIM-NET スタッフ）

シリア・ダマスカス郊外の看護学校で学んでいたが、情勢悪化のため難民としてイラク北部クルド自治区へ逃れた。（2013年8月、当時20歳）難民キャンプで暮していた折、JIM-NET と出会いスタッフとして登用。

難民キャンプにて妊産婦支援、小児がん支援、モスル支援に従事。今なお、混迷を極めるシリア北部ロジャワ地域への現地調査等、精力的に活動している。



シリア国内のアルホール難民キャンプ

今回の訪問の目的は、ハサカ市にあるアルホール難民キャンプの避難民に対する医療支援でした。シリアに対して悲観的な感情を持ちつつ5月26日にシリアの国境に入りましたが、そこにはシリア側に入る人々、シリア側から出ていく人々でごった返していました。そのほとんどはクルド人自治区に向かいたいアフリンから逃れてきた難民たちでした。それは、トルコ軍がアフリンの人々に対して戦争を仕掛けた事が原因でした。

国境でしばらく待ち、全ての書類が確認され、最終的にシリア入りすることが許されました。

その後、書類が渡され、カミシリの移民局とパスポート作成のための部署に案内されましたが、初日は政府機関（YPG）が時間外のため受け付けてもらえず、翌日27日の朝に戻り、無事に用事を済ませることができ、クルド人自治区に戻る日程も決められました。

同日カミシリの NGO（クルド人による）を訪れ、NGO の支援を受けている地域に JIM-NET や、アルホールキャンプに対する JIM-NET の支援を紹介しました。その話を聞いて彼らはとても感激し私を温かく迎え、翌日には医薬品の不足分をリストアップし、良質な薬を揃えるためにグループ内の3名の医師と私が薬局に向かいました。しかし、良質な薬を見つけるのは時間がかかるので、薬の配達を翌日に延期しました。翌日の朝、医師たちと私はアルホールキャンプ内の15000人に対して医薬品を購入しました。

アルホールキャンプ内に収容された人々の状況を実際に目の当たりにして、自分の国や、人々をとてとても気の毒に感じました。キャンプ内にある診療所の待合室には、診察を待つ多くの避難民で溢れていました。検査に必要な物品や薬がかなり不足している状況だったので、薬を支給した事でクリニックやキャンプのマナー

ジャーたちが心から喜び、JIM-NET の支援に感謝していました。

翌日29日には、戦争が終わって ISIS が去った後の現在の状況を視察する為にラッカへ向かいましたが、町に入る際、多くのチェックポイントがあり、通過する際には毎回いくつかの書類の提示を求められました。最終的にはラッカの町を見ることができましたが、戦争が終わった現在と戦争が始まる前では風景が全く違って見えました。全ての建物が破壊され、破壊による建物の残骸が道のいたる所に散らばっていました。全ての建物が地面に崩れ落ちており、この様子を目にし、自分ではどうすることもできない、そして以前の町の姿を取り戻すことができない事にとてとても辛い感情がこみ上げました。

アルホールキャンプで任務を終えた後、ダマスカスを訪問する決心をしました。せっかくシリアに滞在中なので、ダマスカスの日々を思い出す良いチャンスだと考えました。ハミディーエの町を歩きたかったのです。そこで私は航空会社へ行きましたが、ダマスカス行きは満席との事でした。少し高めの金額を支払うことでチケットを取ることができました。

出発日の早朝6時に出発し、カミシリ空港に8時に到着しました。機内では沢山の空席があったにも関わらず、誰かに与えられることはありません。その状況がとても気の毒に感じました。私たちは10時のフライトで出発、午前11時にはダマスカスに到着しました。

今回、娘と一緒にいたのがとても嬉しかったです。娘と共に、ダマスカスの匂いを感じたいとずっと願っていました。それは、最高の場所で教育を受け、学校に通い、私の人生で最も美しく、最高の時間をここダマスカスで過ごしたので、娘にとっても最高の場所だと感じているからです。

12時には空港から出ることができて、ダマスカスの町に向か



いました。ダマスカスは以前と同じようには見えませんでした。都市の中心にあるホテルに到着し、以前と同じように多くの人がいる状況ではありましたが、現地の人たちではなく、ほとんどがアレッポ、ホムス、ラッカ、デリゾールからの避難民でした。

空き家はなく、全ての価格が高騰しており、更には人々の扱いさえも変わってしまっていました。その後ホテルで休憩し、日没後に娘の為に解熱剤を買うために外出したのですが、店は開いておらず、通りに誰も人がいませんでした。薬局すら開いていない状況で、ただ数人の警察官を目にしただけでした。

ホテルのオーナーにこの状況を尋ねると「怖くて外に出られないため、7時過ぎに誰も店を開けていたい人は居ないんだよ」と教えてくれました。日中には沢山の人が溢れているのに夜はまるでゴーストタウンのようで、とても悲しい気持ちになりました。

昔、その通りを歩いてショッピングしていた頃を思い出しました。夜中2時にも安全に帰って当時は24時間の生活がありました。どうしてこんな事になってしまったのか、自問自答するばかりです。

次の日、ハミディーエの店に行きました。入り口と出口にある防御壁以外は通常どおりでした。ショッピングの途中、一人のお年寄りに現在の状況を訪

ねましたが、彼は微笑んで「死以外は何も悪いことは起きていないよ、大丈夫。なぜそんなに恐れるのか。悲しむのか。ただこの瞬間を生きているんだよ」と。

私はハミディーエの店でこの旅を終えましたが、その中で何枚かの写真を取り、後になって気が付きました。以前はこんなに多くの女性が店で働いていなかったということ。だから、この状況は良いことなのかもしれません。その一方で男性は国外に出て難民になったり、シリアに残りシリア軍隊、あるいは、殉教者になったりしている現状です。

(原文はアラビア語 翻訳：JIM-NET 海外事業部)

※ 2018年6月末～7月初めにリーム緊急来日！報告は次号で。



支援の医薬品を整理するリーム

シリア難民人道支援にご協力をお願いします！

ご寄付は、ミルク代や医薬品に使わせていただきます。

**お振込先：ゆうちょ銀行振替口座
00540-2-94945**

加入者名：日本イラク医療ネット

※備考欄に「シリア難民支援」とお書きください。

ご寄付はこちらから→
シリア難民支援（イラク）をお選びください。



第 17 回 JIM-NET 会議を開催

井下 俊 (JIM-NET 理事・医師)



3月16日と17日の2日間にわたりイラク北部のアルビルで、第17回JIM-NET会議が開催された。年に一度、イラクと日本の医師が集まり、医療成績の発表と今後の支援を検討する。

私はJIM-NET会議に3年ぶりに参加。会議の質の低下や医師たちのモチベーションの低下が懸念されたが、会議の質も参加医師たちのモチベーションも維持されており、改めてリカー先生(イラク人医師、信州大学)の尽力に感謝したい。

アルビル(ナナカリ病院)、バグダッド(子ども福祉教育病院、中央小児教育病院)、バスラ(バスラ子ども病院)の各病院ごとの治療評価のデータは、いくつかの間違ひはあるが解析可能な形で提示されており、それをもとに現地で解析し、右記グラフをDr.たちに提示した。

1) 短期的治療評価を Fig.1-a 完全寛解率、Fig.1-b 早期治療関連死、Fig.1-c 治療放棄率に示す。完全寛解達成率は依然 90%以下で目立った改善はない。早期治療関連死も 5%前後を推移しており改善は見られない。しかし、治療放棄率は依然 5%程度であるが低下傾向にあるようで、Dr.たちの感触として徐々に収束しているとのこと。

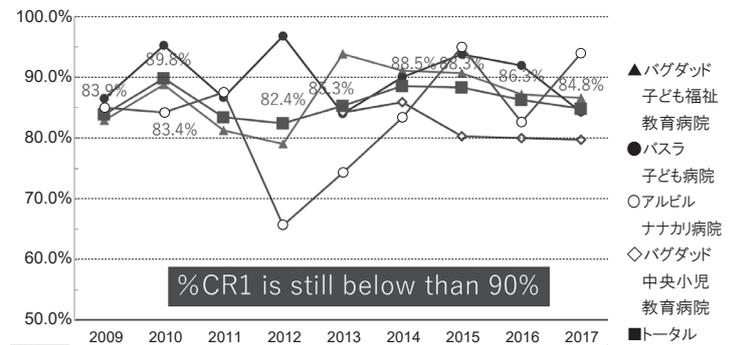
2) 長期治療評価を 2年経過時点での治療放棄、治療関連死(TRM)、再発の3点で評価している(Fig.2)。いずれの因子も徐々に低下しているとみられ、長期生存率は改善していると予想される。

上記のように、目立った治療成績の改善は見られないが、治療放棄率は徐々に減少していると思われる、長期予後は幾分改善していると予想する。

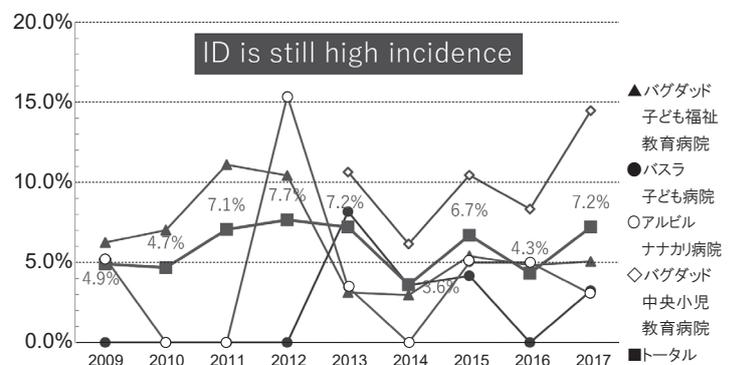
細かいところまでのデータチェックはできていないため、今回生存率曲線までは提示できなかったが、会議後マーゼン先生と話し合い、データシートをいくつか改善し、今後各センターからの生データ収集可能となれば、生存曲線の解析も行う予定。

今回は時間がなく周辺の難民キャンプやスレイマニアを訪問することはできず、JIM-NETハウスを視察したのみであった。スタッフたちが和気あいあいと有効利用しているようである。患者や患者家族との交流の場として、さらに有効利用できればと考える。

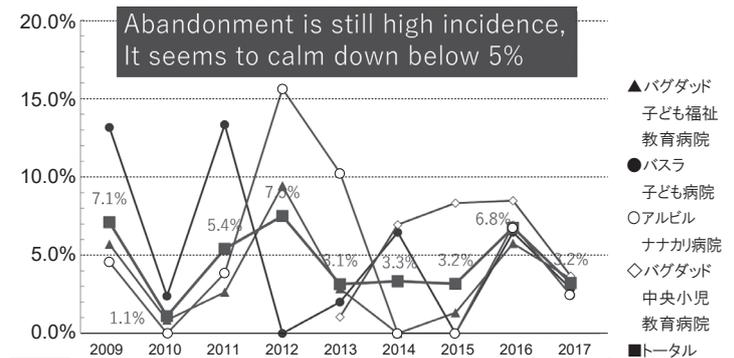
グラフ① Fig.1-a 完全寛解率



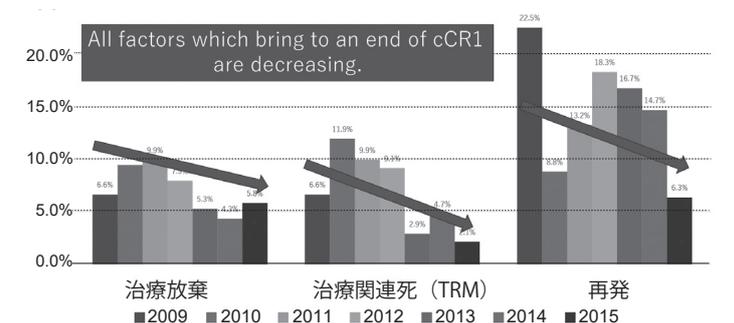
グラフ② Fig.1-b 早期治療関連死



グラフ③ Fig.1-c 治療放棄率



グラフ④ Fig.2 長期治療評価 (2年経過時点での)



ART for PEACE 平和のためのアート

2018年2月9日にギャラリー日比谷で開催された鎌田實代表理事の『がんばらない』トークにご参加いただいた駐日ヨルダン大使夫人・シーファさんと翻訳・通訳のお仕事をされている配川絵理子さん。ちょうど佐藤真紀事務局長がインフルエンザでダウンしていたので、鎌田代表のトークにも力が入りました。イベントの帰り道、おふたりで鎌田代表の話の内容、イラク現地の子どもたち、難民の人々の苦難について話題が広がったそうです。

鎌田代表、佐藤事務局長とシーファさんの出会いは10年以上前に遡ります。イラクの小児がんや小児白血病の専門の医師達がヨルダンで会議を行った折、日本大使館から通訳として紹介された女性が、当時大学生だったシーファさんでした。駐日ヨルダン大使夫人となられた今でも、温かな気持ちでJIM-NETをサポートしてくださっています。



鎌田代表理事、シーファ大使夫人、配川絵理子さん



そんなシーファさんが、改めて鎌田代表の話に触れて閃いたチャリティーイベント「ART for PEACE」。平和のため、人道支援のために活動しているJIM-NET等のNGOへの協力としてアート作品を募り、気に入った作品をチャリティーで購入して頂くイベントです。

3月上旬に開催されたART FAIR TOKYO会場では、シーファさん自ら出展中のギャラリーやアーティストの方々にこのチャリティーイベントの企画についてご紹介されました。その後、御連絡くださったアーティストに加え、シーファさんにご縁ある多くの方々がご協力くださいました。



ART for PEACE発足記念イベントは、5月10日にヨルダン大使公邸で開催されました。小さなフレームに収められたものから珍しい作風のアートまで、約60点の作品が公邸内に美しく展示された様子は、アートギャラリーそのもの。鎌田代表のトークに加え、シーファさんのご友人でシリア出身のタレクさんは、美しいアラビア書道のデモンストレーションをご披露され、一日だけのART for PEACEイベントは、特別なものとなりました。

アーティストの方々との連絡、御自宅の開放、作品の展示準備等、すべてをシーファさんと配川さんが担ってください、その熱心なご様子に心を打たれた方々がお手伝いに加わる・・・というポジティブなスパイラルが続き、無事にイベントを終了することができました。今後、JIM-NETだけでなく他のNGO団体へも協力が続けられることを願っています。

詳細は改めてご報告いたしますが、この場をお借りしてお力添えくださった方々に御礼申し上げます。

崔 麻里 (JIM-NET 広報・イベント担当)

鎌田代表のつぶやき『曇り、ときどき輝く』



いまという時代は、曖昧な曇天のようだ。ともすれば、気持ちが鬱々としてくる。未来にも、なかなか希望は持てない。こんな時代の中でも、丁寧に生きて、自ら光を発し、周りにも、輝きと喜びの輪を広げている人たちがいる。探し出し訪ね歩き、この本を書いた。

5月末に上梓された最新刊は『曇り、ときどき輝く』(集英社)。24の物語が書かれている。そのエッセーの中に、聴診器でテロと闘う3人の若い女性が登場する。

サマーフ(22歳)、ヤジディ教徒。モスル大学の医学部にいたが、イスラム国のテロリストに脅かされて、大学に通うことはできなかった。しかし、日本からたくさんの応援をもらい、大学の転入試験に合格し、医師になった。僕と「聴診器でテロと闘う」と言い合っている。

皆さんからたくさんの応援をいただいた、シンジャールから逃げてきたナブラスというユースイング肉腫の女の子。脳に転移が行き、最後は痛み苦しんだ。亡くなる一か月ほど前、「もう一回元気になろう、元気になったら何がしたい?」と僕が訊くと「シンジャールに戻りたい」「故郷で何がしたいの?」と僕が訊いた。「学校に行きたい、勉強がしたい」。これが最期の言葉だった。

骨肉腫のアヤ(写真下)、足を切断している。彼女は成長期にあるため、義足を定期的に交換している。それはJIM-NETの応援団の皆さんのおかげである。「この足は、日本の友だちから貰ったの」。義足のことである。この本の中で、彼女はこんなことを述べている。「私は病気に負けません。戦争に負けません。貧しさにも負けません」。

過酷な状況が、イラクでは今も続いている。イスラム国は崩壊されたが、イスラム国によってモスルは激しく壊されている。これからの復興が大変だ。こんな状況の中で、必死に未来を見つめ、長く続く平和を目指したいと思っている若者たちが多い。中東を安定させるために、イラクやシリアの平和はどうしても必要です。JIM-NET便りを読んでくださっている皆さんの熱い応援が必要です。

日本中いや世界中、支援に行ったつもりが、かえって勇気と感動をもらった。たくさんの読者から、泣いて笑って力が湧いてきた、と、嬉しい言葉をもらった。これからも一生懸命飛び回っていきます。応援よろしくお願ひいたします。(鎌田 實: JIM-NET 代表理事・医師)



JIM-NET 事務局に新メンバーが着任しました!

金澤絵里 (海外事業担当)

イラク、アルビルの現地駐在員として4月下旬より着任致しました。これまで10年以上の日本での看護師経験、その他アメリカ、タイでの留学経験や、国内外でのボランティア経験があります。以前よりニュースでISに関して報道される中、現地での医療や難民支援など興味があり、念願の



イラクで活動できる事を嬉しく思っております。

これまでの経験を活かし、少しでも人々のお役に立てるように精一杯頑張りたいと思っております。

上出貴史 (経理・総務担当)

4月に入職しました上出貴史と申します。前職では中東に関心がある日本企業への支援を行う団体に勤務し、その間に経験したサウジアラビア駐在ではアラビアのロレンスを彷彿とさせる広大な砂漠での生活を体験しました。

現在は、私の体型がアラビア人男性を彷彿とさせるぐらい大きくなりつつあるので、中東での経験がお役に立てるよう頑張りつつ、生活態度も改めていきたいと思ひます。どうぞ皆さまよろしくお願ひします。



特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク (JIM-NET) 電話 03-6228-0746 メール info-jim@jim-net.net
Facebook アカウント名、『jim-net』で検索 Twitter アカウント名、『JIM_NET』で検索 HPはこちらのQRコード→
郵便振替口座 00540-2-94945 加入者名 日本イラク医療ネット (募金・サポーター会費はこちらへお願ひします)

★ぜひ今後とも JIM-NET をご支援ください!

